

# 放し鰻

岡本綺堂

青空文庫



E君は語る。

本所 相生町あいおいちようの裏店うらだなに住む平吉は、物に追われるように息を切つて駈けて来た。かれは両国の橋番の小屋へ駈け込んで、かねて見識り越ごしの橋番のおやじを呼んで、水を一杯くれと言つた。「どうしなすつた。喧嘩でもしなすつたかね。」と、橋番の老翁おやじはそこにある水桶の水を汲んでやりながら、少しく眉をひそめて訊いた。

平吉はそれにも答えないで、おやじの手から竹柄杓たけびしやくを引つたくるようにして、ひと息にぐつと飲んだ。そうして、自分の駈け

て来た方角を狐のように幾たびか見まわしているのを、橋番のおやじは呆氣あつけに取られたようにながめていた。文政末年の秋の日ももう午ひるに近づいて、広小路の青物市の呼び声はやがて見世物やおでこ芝居の鳴物なりものに変わろうとする頃で、昼ながらどこことなく冷たいような秋風が番小屋の軒の柳を軽くなびかせていた。

「どうかしなすったかえ。」と、おやじは相手の顔をのぞきながら訊いた。

平吉は何か言おうとしてまた躊躇した。かれは無言でそこらにある小桶を指さした。番小屋の店のまえに置いてある盤台風の浅い小桶には、泥鰻どじょうかと間違えられそうなめそつこ鰻が二、三十匹かさなり合つてのたくつていた。これは橋番が内職にしている

放しうなぎで、後生ごしようをねがう人たちは幾らかの錢を払ってその幾匹かを買取つて、眼のまえを流れる大川へ放してやるのであつた。

「ああ、そうかえ。」と、おやじは急に笑い出した。「じやあ、お前、当つたね。」

その声があまり大きかったので、平吉はぎよつとしたらしく、あわててまた左右を見廻したかと思うと、その内ぶところをしつかりと抱えるようにして、なんにも言わずに一目散に駈け出した。駈け出したというよりも逃げ出したのである。彼は転ころげるように両国の長い橋を渡つて、半分は夢中で相生町の自分の家うちへ行き着いた。

ひとり者の彼はふるえる手で入口の錠をあけて、あわてて内へ駈け上がった、奥の三畳の襖をふすまぴったりと立て切つて、やぶれ畳の上にとつかりと坐り込んで、ここに初めてほつと息をついた。かれは橋番のおやじに星をさされた通り、湯島の富で百両にあつたのである。かれは三十になるまで独身で、きざみ煙草の荷をかついで江戸市中の寺々や勤番長屋きんぱんを売り歩いてるのであるから、その収入は知れたもので、このままでは鬢びんの白くなるまで稼ぎ通したところで、しよせん一軒の表店おもてだなを張るなどは思いもよらないことであつた。

ある時、かれは両国の橋番の小屋に休んで、番人のおやじにその述懐じゆっかいをすると、おやじも一緒に溜息をついた。

「御同様に運のない者は仕方がない。だが、おまえの方がわたしらより小銭こぜにが廻る。その小遣いを何とかやりくつて富でも買ってみるんだね。」

「あたるかなあ。」と、平吉は氣のないように考えていた。

「そこは天にある。」と、おやじは悟つたように言った。「無理にすすめて、損をしたと怨まれちやあ困る。」

「いや、やってみよう。当たたらお礼をするぜ。」

「お礼というほどにも及ばないが、この放しうなぎの惣仕舞そうじまいでもして貰うんだね。」

ふたりは笑つて別れた。その以来、平吉は無理なやりくりをして、方々の富礼を買つてみた。

「どうだね。まだ放しうなぎは……。。」と、橋番のおやじは時どき冗談半分に訊いた。

平吉はいつも苦い顔にがをして首をふっていた。それがいよいよきこの湯島の富にあたって、けさその天神の富とみがいしよ会所へ行つて、とどこおりなく金百両を受取つて来たのであるから、彼は夢のよくな喜びと共に一種の大きな不安をも感じた。自分が大金を所持しているのを知つて、誰かうしろから追つてくるようにも思われ、かれは眼にみえない敵を恐れながら湯島から本所までひと息に駆けつづけた。その途中、橋番の小屋に寄つて、おやじにもその喜びを報告しようと思つたのであるが、かれは不思議に舌がこわばつて、なんにも言うことができなかつた。



橋番の方はまずあしたでもいいとして、彼は差しあたりその金の始末に困った。勿論、あたり札、百両といつても、そのうち二割の二十両は冥加金<sup>みよがきん</sup>として奉納して来たので、実際自分のふところにはいつているのは金八十両であるが、その時代の八十両——もとより大金であるから、彼は差しあたりの処分<sup>しぶん</sup>にひどく悩んだ。

正直なかれは、この機会に方々の小さい借金を返してしまおうと思った。それでも五両ほどあれば十分であるから、残りの七十両をどうかしなければならぬ。床下にうずめて置こうかとも考えたが、ひとり者の出商売<sup>であきなひ</sup>の彼としては留守のあいだが不安であった。

金を取ったらどう使おうかということとは、ふだんから能く考えて置いたのであるが、さてその金を使うまでの処分かたについては、かれもまだ考えていなかったもので、今この場にのぞんで俄かに途方にくれた。かれは重いふところを抱えて癪に悩んだ人のようにうめいていたが、やがてあることを思い付いた。彼はすぐにまた飛び出して、町内の左官屋の親方の家へ駈け込んだ。

左官屋の親方はたくさんの出入り場を持つていて工面くめんもいい、人間も正直である。同町内であるから、平吉とはふだんから懇意にしている。平吉はそこへ駈け込んで、親方にそのわけを話して、しばらくその金をあずかって貰うことにしたのである。親方は仕事場へ出て留守であったが、女房がこころよく承知して預かって

くれた。

「だが、わたしは満足に字が書けないから、いずれ親方が帰つて来てから預り証を書いてあげる。それでいいだろうね。」

「へえ、よろしゅうございます。」

重荷をおろしたような、つきもの憑物に離れたような心持で、平吉は自分の家へ帰つた。しかもかれはまだ落ちついてはいられなかつた。かれはすぐにまた飛び出して、近所の時借りなどを返してあるいた。それから下谷まで行つて、一番大口の一両一分を払つて来た。それでもまだ三両ほどの金をふところにして、かれは帰り路に再び両国の橋番をたずねた。

「平さん。また来たね。」と、おやじは行燈あんどうに蠟燭を入れなが

ら声をかけた。

秋の日はもう暮れかかっていた。この時の平吉はもうだんだんに気が落ちついて来たので、あとさきを見廻しながら小声で言った。

「放しうなぎをするよ。」

「いよいよ当たったのかえ。」と、おやじは小声で訊きかえした。

平吉は無言で指一本出してみせると、おやじは眼を丸くして笑った。

「そりや結構だ。おめでたい、おめでたい。だが、日が暮れかかったので鰻はもう奥へ片付けてしまった。いつそあしたにしてくれないか。」

「ああ、いいとも……。代だいだけ渡しておいて、あしたまた来る。」  
言いながら彼は一分金三つをつかんで渡すと、おやじはびつくりしたように透かしてみた。

「こんなに貰っちゃ濟まないな。だが、まあ、折角のお福分わけだ。ありがたく頂戴しておこう。どうぞあした来てください。放しうなぎの惣仕舞は近頃お前ばかりだ。」

礼やお世辞やらをうしろに聞きながら、平吉はまた急ぎ足で自分の家へ帰った。彼は今になってまだ午ひるめし飯を食わないことを初めて思い出したが、これから支度をするのも面倒なのと、ふところには今までに持ったことのない二両あまりの金がまだ残っているのとで、かれはまたあたふたと駈け出して町内のうなぎ屋へ

行つた。一方に放しうなぎをしていながら、一方には久し振りに蒲焼を食おうと思ひ立つたのである。近所で顔を見識つていながらも、ついで二階へ上がったこともない平吉を不思議そうに案内して来た女中にむかつて、彼は小こあらいとところを二皿ばかり焼いてくれと注文した。無論に酒も持つて来いと言つた。

座蒲団のうゑに坐つて、平吉はがっかりした。彼はけさからちつとも落ちついた心持になれないで、唯せかせかと駈けずり廻つていたのである。からだも心も一度に疲れ果てたようで、彼はもう口を利きくのも大儀になつた。それでも、酒や鰻が運び出されると、彼はまた元気がついて、女中を相手に笑つたりしゃべつたりした。女中に一朱しゆの祝儀をやつた。かれは空腹のところへ無暗に

飲んで食って、女中に扶たすけられてようように二階を降りたが、もう正体もなく酔いくずれて、足も地につかないほどになっていた。「平さんはあぶない。すぐ近所だから送っておあげよ。」と、帳場にいる女房が見かねて注意した。

祝儀を貰った義理もあるので、女中はかれの手をひいて表へ出ると、月のひかりは地に落ちて霜のように白かった。路地のなかまで送り込むと、その門かどぐち口には一人の女が人待ち顔にたたずんでいた。

あくる朝になって、この長屋じゆうは勿論、町内をもおどろかすような大事件が発覚した。平吉は奥の三畳で何者にか刺し殺さ

れていた。入口の四畳半の長火鉢のまえには、二人の大の男が血を吐いて死んでいた。

平吉はうなぎ屋から酔って帰って、そのまま奥へはいって寝込んでしまったところへ、他のふたりが忍び寄って刺し殺したのである。かれらはそれから家内を探しまわった末に、入口の長火鉢のまえで酒を飲んだ。それが毒どくしゆ酒であつたので、ふたりともに命をうしなつたのである。それだけのことは検視の上で判明した。しかも、かのふたりは同町内に住んでいる無頼者ならざるものであることも判つた。唯わからないのは、ふたりを殺した毒酒の出所で、平吉が毒酒をたくわえておく筈もない。ふたりが毒酒を持って来て飲む筈もない。酒は一升樽を半分以上も飲み尽くしてあつた。



それからまた二日ほど過ぎた。

両国の橋番のおやじは今朝も幾匹かのうなぎを大川へ放している、かねて顔を識っている本所の左官屋の女房が通りかかった。女房は立ちどまって挨拶して、誰にたのまれてその鰻を放すのだと訊いたので、おやじは煙草屋の平吉の供養くようのためであると正直に話した。平吉は殺される日の夕方ここに寄って百両の富にあたった札だといって三分の金をくれて、放しうなぎの惣仕舞をして行った。そのうなぎは翌朝みんな放してしまつたが、考えると平吉が気の毒でならない。富に当つたのが彼の禍いで、それを教えたのは自分であるから、いよいよ彼に対して済まないような気がしてならない。せめてその供養のために、こうして毎朝幾匹ずつ

かの放し鰻をしているのであると、彼は洩はなをすすりながら話しつづけると、女房は黙って聴いていた。

「平さんもほんとうにお気の毒ね。あたしも御供養ごくように放し鰻をしまししようよ。」

女房から一分の金を渡されて、おやじは又おどろいた。せいぜい五十文か百文が関の山であるのに、平吉は格別、この女房までが一分の金をくれるのはどうしたのであろうと、少しく不審そうにその顔をながめていると、女房は自分の手で小桶から一匹の小さい鰻をつかみ出して川へ投げ込んだ。つづいて自分も身を投げた。橋番のおやじは呆氣あつけに取られて、しばらくは人を呼ぶ声も出なかつた。

死人に口無しで、もとより詳しい事情はわからないが、平吉に毒酒を贈ったのはこの女房であつたらしい。女房は亭主の留守に平吉から七十五両の金をあずけられて、俄かに悪心を起してその金をわが物にしようとする<sup>たく</sup>巧んだ。かれは日の暮れるのを待つて平吉の家をたずねて行つて、富にあたつた祝いとでも名をつけて一升樽を贈つたのであろう。

しかしその時は平吉ももう酔つていたので、その上に飲む元氣もなく、そこらへ酒樽を投げ出したままで正体もなく寝入つてしまつたところへ、町内のならず者ふたりが忍び込んで来た。かれらは平吉が富に當つたことを知つていて、まず彼を刺し殺してその金を奪い取るつもりであつたらしいが、金のありかは判らなか

った。かれらは死人のふところから使い残りの一両あまりを探し出して、わずかに満足するほかはなかつた。かれらは行きがけの駄賃に、そこにある酒樽に眼をつけて飲みはじめた。酒には毒が入れてあつたので、かれらはその場で倒れてしまった。

以上の想像が事実とすれば、平吉を殺そうとした酒が却つて平吉の味方になつて、その場を去らずに仇二人をほろぼしたのである。左官屋の女房が酒を贈らずとも、平吉はしよせん逃がれない命で、もしその酒がなかつたらば賊は易々やすやすと逃げ去つたであろう。平吉に取つて、かの女房は敵か味方か判らない。思えば不思議なめぐりあわせであつた。

しかし、それで女房の罪が帳消しにならないのは判りきつてい

た。たといその結果がどうであろうとも、かれは預りの金を奪わ  
んがために毒酒を平吉に贈ったのであるから、容易ならざる重罪  
人である。女房も詮議がだんだんきびしくなつて来たのを恐れて、  
罪の重荷を放しうなぎと共に大川へ沈めたのであろう。

秋が深くなつて、岸の柳のかけが日ごとに痩せて行つた。橋番  
のおやじは二人の供養のために、毎あさの放し鰻を怠らなかつた。



# 青空文庫情報

底本：「蜘蛛の夢」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年4月20日初版1刷発行

初出：「民衆講談」

1923（大正12）年11月

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：花田泰治郎

2006年5月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。



# 放し鰻

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>